

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

テンプラは安土桃山時代にポルトガルから入ってきた料理である。テンプラということば^①シタイ、調理を意味するポルトガル語、*tempero*がなまったものだ、などの説がある。もともと、日本料理には揚げ物はなかった。寿司もルーツをたどると、中国の雲南省からビルマ、タイあたりにかけての山岳部で、魚を御飯と一緒に漬けたんだ馴れ寿司（いまの日本でいうなら琵琶湖あたりの鮒寿司の類か塩辛みたいなもの）にまで行きつくりたい。独立的にいろいろなところで生まれたという説もあるが、どちらにしろアジアの共通項としての魚の発酵食品であり、^①そこから江戸前寿司が誕生したということはまちがいない。

御飯と魚を塩で漬けて込んで発酵させる食品を、酢飯と酢漬にした魚で手取り早く食べてしまおうという日本のアレンジがなされ（だから本来の江戸前はコハダみたいな酢でしめたものだ。そうでなければアナゴのように火を通したもので、生はない。刺身とは別なのだ）、それがさらに生の魚をネタに使うようになるというステップを踏んでいる。

「日本料理」、「和食」という^②カンバンをだしている食べ物でも少々追究していくと、^②こんなぐあいだ。味噌、醤油のような基本的な調味料も、やはり中国から入ってきて、日本式に変化していったものだ。

こんな話をするのも、別に日本文化を否定しようというのではない。外国からさまざまなものを受容しながら、日本独自の発展を遂げていることは評価に値することである。フランス料理がイタリア料理の影響を受けているからといって、その価値が下がるということではないのと同じことである。

テンプラや寿司は日本料理で、カレーやコロッケはちがうという発想にみなおちいりがちだ。しかし、それはちがうということである。^{※1}偏狭な国粹主義では何もみえてこない。テンプラもカレーも同じ^①で考えなくてはならない。ここまでみてきたカレーの物語が、ほかの食べ物にも同じように存在したのではないかということである。そういう意味では、カレーが日本で受け入れられたことは、それほど大変な変化ではなかつ

たということではないだろうか。

それではなぜ、味噌汁、テンプラは日本料理でカレーはちがうというような感覚があるのだろうか。

石毛直道民族学博物館名誉教授は日本料理の特殊性の一つとして、プロによる高級料理と家庭料理とのちがいが極端になったことをあげている。

「肉食の復活と、洋食という新しいシステムの出現に対して、プロの日本料理人たちはそれを取り入れて伝統的な日本料理のシステムを再編成することをしなかった。幕末の時期におけるシステムをそのまま固定化し、^③みずからを化石化することによって、伝統的なシステムをまもる方向にむかっただのである。以後、カレーライスやコロッケなどを取りこんでいく家庭の食事のシステムと伝統的素材と技術にこだわる日本料理専門店との差が著しくなっていく。専門家による高級料理である^{※2}オート・キエイジーヌと家庭料理の違いは、料理文化を洗練させた諸国にみられることであるが、その差がわが国ほど著しいことはない。和、洋、中華、朝鮮焼き肉やキムチなどがならぶ現在の家庭の食卓と、料亭の日本料理は一見したところではほとんど異なるシステムにうつるであろう」（『外来の食事文化』食の文化フォーラム『外来の食の文化』ドメス出版）

わたしたちが「これが日本料理」と思い描くモデルは、やはり家庭のものより料亭などのプロが作るものから発しているだろう。そのプロたちは、明治維新以後に入ってきたものを受け入れないで日本料理というシステム、約束事を作ってしまったということだろう。だから、日本料理とは幕末までの日本で形成された料理タイ^③ケイで、明治維新以後に入ってきたものは入れてもらえない、という意識がある。受け入れながらも、日本料理の^{※3}範疇に入らない「よそもの」と意識しつづけるという構図である。

考えようによっては、それだけ明治維新以降の変化が大きかったということである。あるいは、わたしたちの頭の中で、この時代がまだ整理されていないということもいえる。どちらにしろ、そういう存在であったカレーとラーメンが国民食となったことが、^④日本料理をめぐる状況を象徴しているように思える。

カレーが受け入れられる第一歩が、肉食の解禁、普及であった。これが前提条件であろう。

明治以前の日本では、仏教によつて肉食が^{※4}タブーであった。もつとも、兎を一羽、二羽と数える習慣が示すように、獣ではない、食べてもいい鳥だとかまかすことで食べることを正当化する例もある。猪などを山くじらと称するのと同じ類である。⁽⁵⁾肉食はタブーということとは、それだけ食べていたということである。

桜田門外の変の井伊直弼の近江井伊家は天津牛を屠り、味噌漬にして將軍家や^{※5}御三家に献上していたという。徳川齊昭はとくにこれが好物だったという話もある。

「われわれは決してある歴史家の想像したように、^{※6}犬を忘れてしまった人民ではなかった。牛だけははなだ意外であったかもしれないが、山の獣は引き続き冬ごとに食っていたのである。家猪も土地によつては食用のために飼っていた。都市にはこの香気を穢れと感ずる風が、しだいに普及していたのも事実であるが、一方にはいわゆる菓食の趣味は、追い追いに新たな信徒を加えていたので、ただ多数の者は一生の間、これを食わずとも生きられる方法を知っていたというに過ぎぬ。だから初めて新時代に教えられたのは、多く食うべしという一事であったとも言える。これは至つて容易なる教育で、もちろんたちまちにして人はこの味を学ぶことの遅かったのを悔んだのであるが、最初はただ無邪気なる模倣であった」(柳田国男『明治大正史 世相篇』)

仏教の影響でまったく食べていなかったみたいな話を否定したためか、まるでだれでも一生懸命肉ばかり食べていたようだが、とにかく肉食に関しては地域や立場による格差が大きかったようである。

肉を食べるのが普通だったから「解禁」という意識のところもあつただろう。しかし、都市部の町民など大多数の人々にとつては肉食をはじめるといふことでもあつた。

明治の文明開化では、遅れてしまった西洋に追いつこう、見習おうという発想がある。食では肉食がもつとも目立つ部分なのである。

Ⅱ といつていい。西洋料理というタイケイの受容より肉食という現象のほうが簡単に受け入れられるということだろうか。(森枝卓士『カレーライスと日本人』より。出題にあたり、本文の一部を改めました。)

(注) ※1 偏狭な国粹主義……自国の文化のみがすぐれていると考えること。

※2 オート・キュイジーヌ……フランスの伝統的な高級料理。

※3 範疇……同じ種類のもの所属する部類。

※4 タブー……禁じられていること。

※5 御三家……徳川家康の子を祖とする尾張、紀伊、水戸の三家。徳川齊昭は幕末の水戸藩主。

※6 犬……食用となる獣の肉。

問1 線①②③と同じ漢字を使うものを次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① ジ タイ
ア 新しいジギョウを始めます。
イ 先生のシジにしたがう。
ウ 人形をジザイにあやつる。
エ 入学トウジの写真を見つける。

② カンバン
ア どのリヨカンも満員だ。
イ 自然現象をカンサツする。
ウ 植物の各キカンを調べる。
エ 病の母をカンピョウする。

③ タイケイ
ア 先祖のケイズを探し当てる。
イ コウケイの大きなレンズ。
ウ 伝統とケイシキを重んじる。
エ 両国は密接なカンケイにある。

問2 I にあてはまる言葉としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 次元 イ 分野 ウ 感性 エ 価値

問3 線(1)「そこから江戸前寿司が誕生したということはまちがいない」とありますが、「江戸前寿司」はどのようにして誕生したのですか。その説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア アジアの山岳部で生まれた馴れ寿司が日本の琵琶湖周辺の地方に伝わり、さらに手っ取り早く食べられる現在の「江戸前寿司」となった。
- イ アジアで生まれた魚の発酵食品が、日本で時間をかけずにできる料理に生まれ変わり、さらに生の魚を用いる現在の「江戸前寿司」となった。
- ウ 世界各地でそれぞれ独立して生まれた魚料理が日本に伝わり、さらに日本人の味覚に合うようにアレンジされて現在の「江戸前寿司」となった。
- エ 中国の山岳部で生まれた馴れ寿司と琵琶湖地方の伝統料理が合体し、さらに手軽に調理できるように改良が加えられて現在の「江戸前寿司」となった。

問4 線(2)「こんなぐあいだ」とは、どのようなことを言いますか。その説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「日本料理」と信じられているものは、そのほとんどが中国で生まれた料理だということ。
- イ 「日本料理」と呼ばれるものの多くは、もともとは外国から伝わってきた料理であること。
- ウ 「日本料理」と言われるものでも、基本的な味付けには外国産の調味料を使用していること。
- エ 「日本料理」とされるものは外国の料理をまねたもので、純粋な日本料理は存在しないこと。

問5 線(3)「みずからを化石化する」とは、具体的にはどのようなことを意味していますか。もっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本料理の素材と技術を門外不出として極秘に発展させること。
- イ 日本料理の素材と技術を手厚く保護して子孫に伝えようとする事。
- ウ 日本料理の素材と技術を長い時間をかけてすぐれた日本文化に育てあげること。
- エ 日本料理の素材と技術を他からの影響を受けないようにかたくなに守り続けること。

問6 ——線(4)「日本料理をめぐる状況」とは、どのような状況ですか。その説明としてもっとも適切なものを次のア、イ、ウの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「日本料理」が専門家たちによって日本固有の文化として著しい発展をとげたため、しろうとの作る家庭料理との技術の差が大きく広がってしまった。

イ 「日本料理」の専門家たちが明治維新後の大きな変化についていけなかったことが、家庭の食卓から日本料理が消えていくという結果を招くことになった。

ウ 「日本料理」の専門家たちは外国の料理を受け入れようとしなかったが、日本の家庭では明治維新後に入ってきた外国の料理を積極的に取り入れ、独自の食文化をつくりあげた。

エ 「日本料理」が専門家たちによって守られてきたにもかかわらず、多くの国民は外国の料理と日本料理の区別ができず、食卓にさまざまな国の料理が混在することになってしまった。

問7 ——線(5)「肉食はタブーということは、それだけ食べていたということである」と言えるのはなぜですか。その理由としてもっとも適切なものを次のア、イ、ウの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 肉食を禁止したことは、それだけ肉食が行われていたことの証明でもあるから。

イ 肉食を禁止したことで、人々に肉食に対して興味や関心を持たせてしまったから。

ウ 肉食を禁止することで、肉食ほど美味なものはないことを世に示しているから。

エ 肉食を禁止することは、かくれて肉を食べる者を増やすことにつながるから。

問8 II にあてはまる言葉としてもっとも適切なものを次のア、イ、ウの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 和食がついに、肉食を取り入れた

イ 洋食よりさきに、肉食が広まった

ウ 家庭料理が、肉食中心に変わった

エ 西洋料理よりも、肉食が好まれた

問9 本文における筆者の考えとして適切でないものを次のア、イ、ウの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 味噌汁やテンぷらは日本で生まれた独自の食文化だと私たちは考えてしまいがちだが、どちらも海外から伝わった調理方法が日本式に変化したものである。

イ 明治以前の日本で一部の人々に行われていた肉食が、明治の文明開化で都市に住む人々に広まった結果、カレーが家庭に受け入れられて国民食となった。

ウ 日本料理の起源が外国の料理にあったとしても、日本人がさまざまな国の料理を取り入れながら日本料理を独自のものとして発展させてきたことは評価するべきである。

エ 世界にはこる「日本料理」を生んだのは、外国の料理を積極的に取り入れた江戸時代までの人々と、かたくなに外国の料理をこぼみ続けた明治以降の料理人たちである。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

秋に地域の文化会館で行われるコンサート、通称秋コンは、基本的には二年生と三年生のみが出て演奏することになっているのだけれど、例外的に、新入生の中から二人だけの参加が決まった。一人は小学生のときからクラリネットを習っているという女の子で、もう一人は横田だった。誰もが納得する結果だった。横田は一部の上級生よりも演奏がうまくなっているくらいだったから。

秋コンが近づいた夏休み明けのある日、三年生が行事の準備で留守にしたことがあった。なぜだかホルンパートの他の二年生や一年生も遅れるか欠席するかして、練習教室では、あたしと横田の二人きりになっていた。もう見慣れていたけど、それでもやっぱり練習熱心な横田の様子が目をひいて、あたしは言った。

「いつも本当に練習頑張ってるよね」

横田は顔をあげて、⁽¹⁾ ちよつと意外そうな顔をした。考えてみれば、そんなふう二人だけで話すのなんて、そのときが初めてだったかもしれない。

「ホルンってすごいと思うんですね。もちろんホルンだけじゃなくて、他の楽器もなんですけど」

「すごい？」

あたしは訊きかえした。

「⁽²⁾ これって、変わった形じゃないですか」

ホルンの管部分をなぞりながら、横田はいつもよりも大きめの声で言った。心からそう思っている様子だった。あたしは、彼が何を言いたいのかわからず、ただ、うん、と頷いた。確かにホルンは奇妙な形をしていると思う。丸をはじめとするさまざまな図形が組み合わされ、いくつもの管がカーブを描いている。

「こんな複雑な形を作り出して、この音色を作った人たちがいるんだなって思うと、その情熱に感動しちゃうんですね。実際、ホルンの音色って、すごく味わい深いと思うし。すげーなー、って考えはじめると、絶対うま

くなりたいなー、って思えてくるんです。ホルンって、世界一難しい金管楽器って言われてるくらいだし、おれが頑張ったところでそんな簡単に吹けるようになるわけじゃないんですけど。でも、毎日吹いてると、やっぱり少しずつ音色も変わってきた気がするし、そういうのも嬉しいんです」

あたしは驚いていた。毎日のように同じ楽器を演奏しながらも、こんなにもモチベーションや、思い入れが異なっていたんだということに。ホルンについてここまで嬉しそうに話す人を見たのは、はじめてだった。

「すみません、しゃべりすぎですね。熱くなっちゃって、ちよつと気持ち悪いですよ」

苦笑する横田に、あたしは、ううん、と言った。

「そんなことないよ。今聞いてて、なんかこっちが感動しちゃったし、もつと頑張らなきゃって思った。あたしも、ホルンもつと好きになりたい」

心から思ったことをそのまま伝えると、横田は、先輩に向かってすみません、と嬉しそうにしていた。恐縮しているのに、どこか誇らしげでもあった。

「⁽³⁾ あたしもまた、少し誇らしかった。自分の持っているホルンという楽器が、この世界の中で、特別に光り輝く宝物であるかのように感じられて。」

生徒玄関まで来ると遠ざかる吹奏楽の音は、校舎を出ると、また一瞬大きく感じられる。冬でも校舎の窓が開いているせいだろう。混ざり合う数々の楽器の音を、背中で受け止めながら、自宅へ向かって歩き出す。あの中に混ざっている、⁽⁴⁾ 一つだけの特別な音。

吹奏楽部は毎年、卒業式で一曲演奏することが慣例となっている。横田は練習のさなかに、あたしについて、何かを思ったりすることがあるだろうか。

横田とは、ホルンについて初めて話して以来、しょっちゅう会話を交わすようになった。練習曲について、横田が好きだという交響曲について、部活の練習スケジュールについて、他の下級生について、先生について。

横田と話すのは、クラスや部活の友だちと話すのとはまた違った楽しさがあった。年齢よりもしつかりしているように感じられるところもあれば、意外にも天然ボケなところもあって、興味深かった。

いつのまにか、あたしの視線は横田を追うようになっていた。

自分の気持ちに気づいてからも、あたしたちは仲のいい先輩と後輩で、それ以上に踏み込むようなことはなかった。向こうがどんなふうにいるのかはわからなかったし、今だってわからない。

この角を曲がれば校舎が見えなくなる、というポイントの信号で、あたしは立ち止まり、振り返ってみる。あの教室で、今日も横田はホルンを吹いているのだろう。真剣な表情で。落ち着いて指を動かして。

時々、校舎内で横田とすれ違うことがある。そう広くない校舎だから不思議なことではないのに、部活以外で会う彼の姿に、⁽⁵⁾あたしはいつも戸惑^{とまど}ってしまう。

「こんにちは」

いつでも、横田はあたしをまつすぐに見つめながら挨拶^{あいさつ}をしてくる。こんにちは、とあたしは返す。もしも時間がありそうなら、部活の話をしたりもする。けれどそれだけ。吹奏楽部で会っていたときのように、あまり多くの話はしない。いつのまにか横田の身長は、あたしよりも高くなっている。あんなにたくさん会っていたのに、それがいつからなのか、あたしにはわからない。

卒業まであと何日なのか、きつと落ち着いて考えれば、簡単に数えることができるけど、あえて考えない。迫^{せま}っている高校受験のことは気にしなきゃいけないと思うけど、あたしの胸の中には、⁽⁶⁾もつと気になることがあって、英単語も数学の公式もうまく吸収^{あきゅう}することができない。

信号が変わる。うつむいたあたしは、⁽⁷⁾渡^{わた}っている横断歩道の黒い部分を川に見立ててみる。⁽⁸⁾越^こすに越されぬ大井川、と言った先生の声^{こゑ}がよみがえる。あえて白い部分だけを踏んでいく。簡単に越えられる川は、だけど本^{ほん}当^{とう}の川^{がわ}じゃない。

こんなふう^{ふう}に越えていくことができればいいのに。明日目^{あした}が覚^さめたら、横田^{よこた}が同^{どう}い^い年^{ねん}になっ^なって^っい^いれ^ばい^いの^に。

叶^{かな}はずもない願^{ねが}い事^{こと}を抱^{かか}えながら、あたしはあつというまに道路^{だうぢ}を横断^{よこたん}し終^おえてしま^まう。⁽⁸⁾もう耳^{みみ}をすましてみても、ホルンの音^ねは聴^きこえない。
(加藤千恵「流れる川」より。)

(注) ※1 モチベーション……物事^{ぶつじ}を行^いう意欲^{いよく}。やる気。

※2 越^こすに越^こされぬ大井川……大井川は静岡県^{しずまへけん}を流^{なが}れる川^{がわ}。江戸時代^{えどじだい}には橋^{はし}や渡^{わた}り船^{ふね}がなかつたため、旅人^{りょじん}は馬^{うま}や人^{ひと}の肩^{かた}に乗^のってこの川^{がわ}を渡^{わた}った。「越^こすに越^こされぬ大井川」は川^{がわ}を渡^{わた}る苦^く労^{らう}を表現^{ひょうげん}したものである。

問1 〰〰〰線a「目をひいて」、b「思い入れ」の本文中^{ほんぶん}での意味^{いみ}としてもつとも適切^{てき}なものを、次のア～エの中^{なか}から一つずつ選^{えら}び、それぞれ記号^{きごう}で答^{こた}えなさい。

a 目をひいて
ア いやになって
ウ 気^きになつて
エ 信^{しん}じられなくて

b 思い入れ
ア 物事^{ぶつじ}に対する集中^{しゆんしゆ}の程度^{ていど}
ウ 物事^{ぶつじ}に対する知識^{ちしき}の広^{ひろ}さ
イ 物事^{ぶつじ}に対する心^{こゝろ}のこめ方^{かた}
エ 物事^{ぶつじ}に対する誠^{まこと}実^{じつ}な姿勢^{しせ}

問2 線(1)「ちょっと意外そうな顔をした」とありますが、横田はなぜ「意外そうな顔」をしたのですか。その理由としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いつも熱心に練習する姿を見ているはずなのに、今日に限って声をかけてくる先輩の意図がわからず疑問に思ったから。

イ 新入生の自分がメンバーに選ばれたことをうらんでいるにちがいない先輩が、急に話しかけてきたのでとまどったから。

ウ これまで気さくに話しかけてくることのなかった先輩が、いきなり親しげに声をかけてきたので不思議に思ったから。

エ 秋コンが近づき練習に熱が入るのはあたりまえのことなのに、冷やかすように声をかけてきた先輩の態度が心外だったから。

問3 線(2)「これって、変わった形じゃないですか」とありますが、「横田」のホルンに対する気持ちの説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 複雑な形をしているホルンを演奏することが、今の自分の技術ではうまくいかないので悩んでいる。

イ 複雑な形で音を出すことが難しいホルンを、上手に演奏できるようになってきたので満足している。

ウ 複雑な形をしているホルンがどうして深い味わいの音色を発するのだろうかと思議に思っている。

エ 複雑な形から生み出されるホルンの音色に心が引きつけられて、演奏することに喜びを感じている。

問4 線(3)「あたしもまた、少し誇らしかった」とありますが、このときの「あたし」の気持ちの説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

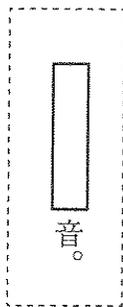
ア 横田の話を聞いてホルンという楽器のすばらしさに初めて気づき、自分自身もホルンの奏者の一人であることに誇らしさを感じた。

イ 自分がいつも使っているホルンという楽器を横田にほめられ、自分自身が横田にほめられたような気がして誇らしさを感じた。

ウ ホルンの演奏者としては自分よりも優位に立つ後輩の横田に、初めて先輩らしい助言ができてうれしさとともに誇らしさを感じた。

エ 横田のような新入部員でさえしつかりとした音楽観を持っている、この吹奏楽部の部員であることに誇らしさを感じた。

問5 線(4)「一つだけの特別な音」は何を指していますか。次の□にあてはまる言葉を本文中の語を用いて七字で答えなさい。(句読点、記号等も字数に数えます。)



- 問6 ——線(5)「あたしはいつも戸惑ってしまふ」とありますが、なぜ「あたし」は「戸惑ってしまふ」のですか。その理由としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 部活では先輩・後輩の関係で横田と自然に話すことができるが、部活以外では人の目が気になって横田に気軽に声をかけづらいから。
- イ 部活ではホルンしか見ていない横田が、部活以外の場所ではまっすぐに「あたし」を見つめてくるので、ぎまぎしてしまふから。
- ウ 部活では天然ボケなところもある横田が、部活以外ではまっすぐに別人のようになりしつかりとした態度なので、緊張きんちやうしてしまふから。
- エ 部活では音楽や部員のことなど横田と話すことがいろいろあるが、部活以外の場所では横田と何を話してよいかわからないから。

- 問7 ——線(6)「もっと気になること」とは何ですか。その説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア いつも横田のことが気になって勉強にまるで手がつかないこと。
- イ 卒業すればもう横田とは会えなくなるのではないかということ。
- ウ 横田が「あたし」からどんな遠ざかっていくような気がする。
- エ 部活以外で横田と仲良くつきあうにはどうすればよいかということ。

- 問8 ——線(7)「渡っている横断歩道の黒い部分を川に見立ててみる」とありますが、「川」とはどのようなことをあらわしていますか。その説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア どんなに時がたっても、横田は後輩で「あたし」は先輩のままである関係。
- イ 「あたし」がこれまで以上に努力しても、横田の技術に追いつけない状態。
- ウ 高校進学をめざす「あたし」とこのまま学校に残る横田の考え方のちがひ。
- エ 横田と「あたし」との間をへだてている音楽そのものに対するやる気の差。

- 問9 ——線(8)「もう耳をすましてみても、ホルンの音は聴こえない」とありますが、このときの「あたし」の気持ちの説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 横田はホルンに夢中で「あたし」にはまったく関心を持っていないだろうと思うと、さびしさにたえられないでいる。
- イ ホルンのことも横田のことも大切な思い出として心の中にしまっておき、自分は自分の道を進もうとあきらめている。
- ウ 叶わない願い事をいつまでも抱えているより、横田のことは忘れて高校受験に専念しなければならないと思直している。
- エ まもなく「あたし」が卒業してしまふと横田とはなればなれになってしまうだろうと考え、悲しくしずんでいる。

問10 本文の内容の説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「越すに越されぬ大井川」という歌を土台に、卒業を間近にひかえた女子中学生の思いを過去と現在の場面を織りまぜながら描いている。

イ 「越すに越されぬ大井川」という歌を土台に、後輩に心を寄せる女子中学生の思いを「あたし」の視点から順を追って描いている。

ウ 「越すに越されぬ大井川」という歌を土台に、音楽を志す二人の中学生の出会いと別れをたとえの表現を多用しながら描いている。

エ 「越すに越されぬ大井川」という歌を土台に、たがいに引かれあう二人の中学生のそれぞれの思いと恋のゆくえを感傷的に描いている。

以上で問題は終わりです。

一

問 1

①

②

③

問 2

問 3

問 4

問 5

問 6

問 7

問 8

問 9

一 の 得 点

二

問 1

a

b

問 2

問 3

問 4

問 5

音。

問 6

問 7

問 8

問 9

問 10

二 の 得 点

総 得 点